

想ひ

松下 幹生

想ひ女がため 魂（こころ）を込めし 簪（かんざし）の
（きみ）

槌音（つちおと）響く 宵の月
行灯（あんどん）の 揺れる灯（ひかり）に 照らされて
妖しく反射（ひかる） 銀の肌
細工は細かく 縮緬背景（ちりめんはだ）に 竜胆（りんどう）の華

春の陽に 桜の下（もと）での 擦れ違い
小さき悲鳴（こえ）の 聞こえたり
華下駄の 鼻緒が切れて よろめいた
その女（み）を受けて 支えより
下駄挿げ替えに 肩を貸す目は
憂いの萤火（ほたび）

恋い焦がれ 想ひ届けと 付け文の
格子の隙より 差し入れし
待ちかねた 嬉しき返事の 来たりなば
想ひ届きて 身（はだ）重ね
炎（ほむら）の如き この身預ける
熱き閨床（ねやどこ）

人妻（ひとはだ）愛しき 夜半（よわ）の月